

# 学会彙報

(昭和四十四年四月以降)

○新入会員歓迎会(五月二十八日於枳敷邸)  
今年度は新入会員として文学部四十七名、大学院十三名を迎え、正会員、特別会員の総計は百七十一名となった。  
出席者 佐々木現順会長ほか教職員、学生多数。

○研究発表会(九月十八日)

一、「ウバーサカジャナーランカーラについて」 吉元 信行氏  
一、「南北朝時代の佛教学」

横超慧日教授

出席者 佐々木現順会長ほか教職員、学生五十余名

○会員出版書目

佐々木現順教授「阿毘達磨順正理論」  
(昭和四十四年安居講本、七月刊、東本願寺出版部)

○九月十八日研究発表要旨

「Upāsakajālanāhāra に つ い て」

吉元 信行

Upāsakajālanāhāra は、十二世紀頃セイロンで Ananda と いう論師が、セイロン上座部 Mahāvihāra における在家佛教について著わした綱要書である。本書については、既に校部援助教授によって佛教学セミナー第四号に詳しく紹介されている。また The Journal of Royal Asiatic Society, 1966, 3/4 p. 155 には K. R. Norman によって特に critical な書評が試みられている。本書は H. Saddhātissa が実に厳密な Introduction と校訂をなし、1965年 Roman-script としては始めて公にされたものである。この書評は、そういう完璧な Introduction と校訂の中に見える、重要な誤りと問題点を二三見出している。我々が本書を研究する上において、この書評の役割りは重要なものとなるろう。

Upāsakajālanāhāra は優婆塞衆莊嚴とでも訳すべきか、優婆塞達が自身を莊嚴すること、或は、優婆塞優婆夷の衆が僧伽を飾ることである。この論の最初に造論の意趣が偈で述べられるが、ここでは Upāsakajālanāhāra という言葉が

三度も使われている。又、ビルマ版では本論は Upāsakajālanāhāra と呼ばれている。従って、本論の名前は Upāsakajālanāhāra とした方が適当であろう。

次に散文によって、本論は佛説であり、経藏における小部に属すると、本論の位置が示され、三帰依によって優婆塞が存在するとして、在家佛教における三帰依の意義が説き示されるのである。

三帰依は帰依経に説かれたもので、経の種々の利益、そして、それが誰によって、どこで、いつ、何故に説示されたかということが論究される。そして、三帰依という業の実践的あり方と色んな面からの差別が詳しく述べられ、信と六隨念を解説し已って第一章が終了している。

第二章の始めにある文章によって、第一章は本論の序文であると見ることができ。つまり、第一章は在家佛教の入門であるというところに大きな意義を持つことになる。南伝佛教に於ける在家佛教はその究極の目的は出家にある。その様な二流的存在である在家佛教のために、この様に大部な完璧な綱要書が出たということは、固定化された出家佛教を刷新するという大きな意義を示すものであるろう。